



# 手応えの ない話

川崎ゆきお

あまり反応のないようなことをやるのは苦痛だ。それが無駄なことであっても、何等かの反応、見返り、手応えがあると何とかやっていけるのだが、無反応に近いと、苦行をしているようなものだ。または瞑想かもしれない。それをやりながら、他のことを考えているようなもので、または何も考えないで、ただ頭に浮かぶことを見ている程度か。

「やはりメリットがないと、しないでしょ」

「収入とかね」

「そうそう、だから仕事をすると反応がある。手応えもある。給料日にそれが出ます。これをしないと、来月から食べていけないですから、口当たりもなくなります」

「そうですねえ、有意義なことをしなくては」

「そうです。そうです。しかし私もお宅も、それがない」

「はい、そうなんです。だから、せめて手応えのあることをしていきたい。ボランティアでもいい」

「私はそういうのは嫌ですねえ。何かしたのに、報酬がないでは」

「確かにそうです。でも、他に報酬を得る道がなければ、まあ、仕方がないでしょ。働き口があるならボランティアなんてしないですよ」

「そんなボランティアの話じゃなく、手応え、反応が欲しいのです」

「自己新記録を出すとかはどうです」

「それ、誰かに誇れますか」

「え」

「だから、自慢できますか」

「いや、それほど特出したものじゃないので」

「やはり、反応は他人様からの評価でしょ。または、何かをすることで、誰かに影響を与え、アクションを起こさせるとかです。自分一人の世界だけじゃ、手応えや反応とは言えません」

「確かにそうですねえ。一人でチャンバラごっこをやっているようなものです」

「何かありませんか」

「他人様が反応してくれるようなことですか」

「そうです」

「自慢したいとか」

「それもいいですが、あまり自慢できるようなものがなくて」

「そうですねえ。細かい話でなら自慢できそうなことがありますけど、まあ、評価されるようなものじゃない。人より優れていても、その事柄自体、殆ど評価されないのなら、自慢にも何もならない。やはり、他人様からの評価が欲しいと」

「はいはい、褒めてもらったりとかです」

「ううん」

「どうかしましたか」

「その路線ですとね。褒め続けられるようなことをし続けないとだめなんです。これもまた苦行なんですよ」

「はあ」

「善人の振りをして、褒められた。感謝された。親切な人として評価されてしまいますと、不親切ができなくなる。これは苦行ですよ」

「ほう」

「だから、あまり手応えもなく、反応もないことでも、コツコツと地味にやっている方がまだしも、ました。同じ苦行ですが、こちらこそは本当の苦行で、もう行者ですよ。誰かのためでもなく、自分のためでもない。ボケているわけじゃないですが、無反応を気にせず、それを心の支えなんぞにはせず、ただただ淡々とやる」

「できてますか、あなた」

「できておりません。やはり反応が欲しいです」

「そうでしょ」

「仰るとおり、しかし、他に反応が期待できるものがなければ、そんなことでもやっているしかないでしょ」

「それを枯淡の境地と申すのでしょうか」

「枯れ木は折れやすいので、だめです。やはり生木でないと」

「枯れ木は死んでいるのですな」

「そうです」

「しかし、反応が欲しいですなあ」

「反応がないと言うことが反応です」

「なるほど、あったんだ。反応が」

「手応えも、あってもなくても、手応えでしょ」

「僕も、何とか誤魔化してみます」

「そうなさい。これもまたやり出すといいものですよ」

「反応のないことをやり続けることができますか」

「そうです。味が徐々に出てくる」

「ほう」

「まあ、無反応地帯を奥深く進めば、それが見えてきますぞ」

「参考にしますが、解ではありませんなあ」

「仰るとおり」

了